停滞気味だった民族ドイツ人の帰還政策もこれで弾みがついたと思われた。

ユダヤ人の退去をあてこんだヒトラー政府は、四〇年八月から翌月にかけてルーマニア、ハンガリー、ソ連の民族ドイツ人の帰還・入植計画を発表した。

ところが、すべての問題を解決するかに見えたこの計画も、数ヵ月後には見通しが失われてしまう。というのも、マダガスカル計画はイギリスとの講和の実現を前提としていたからだ。ヒトラーは四〇年夏、イギリス本土上陸作戦を決意したが、挙国一致内閣を率いるウィンストン・チャーチル（一八七四～一九六五）の徹底抗戦、不屈の「ブリテンの戦い」を前に断念せざるを得ず、制海権を得られないドイツに、マダガスカル計画を実行する力はなかった。

総督府長官のフランクが「ユダヤ人から解放される」と小躍りしたのもつかのま、再び行き場を失ったユダヤ人を一時的に拘留するゲットーの建設が始まった。四〇年一一月一五日のワルシャワ・ゲットーの完成は、こうした移住政策の行き詰まりに対応するものだ

パリ陥落（1940年）。凱旋門下を行進するドイツ軍

マダガスカル計画がご破算となったあとも、民族ドイツ人の帰還・入植政策は続けられた。四一年一月にはベッサラヴィア、ブコヴィナの民族ドイツ人を受け入れるため、東部編入地域のポーランド人七七万人の総督府領への退去が決まった。総督府領では彼らの住居を確保するため、すべてのユダヤ人がゲットーに押し込められることになった。

ところが、この大規模な移住計画もヒトラーの対ソ戦争準備指令（四〇年一二月一八日）のために中断を余儀なくされる。しかし今回は親衛隊の高官たちは悲観的ではなかった。独ソ戦での勝利がソ連の東方かなたに広大な占領地をもたらし、その周縁部にユダヤ人を追放できると考えたからだ。こうして、ナチ・ドイツはユダヤ人の最終的な追放先を特定しないまま、問題の解決を先送りしたのである。

独ソ戦争とホロコーストの始まり

一九四一年六月二二日、ドイツ軍は独ソ不可侵条約を破ってソ連領内に侵攻した。こうして始まった独ソ戦は、次の三つの意味でホロコーストの引き金を引くことになった。

第一に、この戦争がヒトラーにとっては単なる軍事対決ではなく、ボリシェヴィズム（ソ連共産主義）に対するイデオロギー的な「十字軍戦争」、そしてスラヴ諸民族への苛烈な「人種戦争」であったことだ。ボリシェヴィズムをユダヤ人の化身だとみなすヒトラー

は、ユダヤ人をボリシェヴィズムと同一視し、ともに絶滅の対象とした。

第二に、ヒトラーはこの戦争の目的を、「ユダヤ＝ボリシェヴィズム」が支配する現下のソ連邦を倒し、広大なヨーロッパ・ロシア平原に「大ゲルマン帝国」（ヒトラーはこの言葉で将来のドイツを語った）の発展に必要な「生空間（レーベンスラウム）」を樹立することに求めていたことだ。「生空間」は、「大ゲルマン帝国」が欲する食糧・原料・労働力を提供する場であり、そこにユダヤ人に居場所がないことは明らかだった。

第三は、ドイツ軍の後方から展開して占領地の治安対策を担った親衛隊行動部隊が、殺害するのは指導者的立場のユダヤ人に限るという当初の命令を無視して、女性と子どもを含むすべてのユダヤ人を射殺し始めたことである。捕らえられた犠牲者は命じられるままに壕を掘らされ、その前に並ばされて機関銃で射ち殺された。四つの部隊からなる親衛隊行動部隊は、現地の民衆にもともと根づいていた反ユダヤ主義、そして反ソ感情（ユダヤ人は直前まで現地を支配していたソ連と通じていたとみなされていた）も利用し、ときに暴力事件（ポグロム）を煽って作戦を展開した。

親衛隊行動部隊は独ソ戦の短期決着を信じて、競い合うように「成果」を増大させた。独ソ開戦後半年で五〇万人以上のユダヤ人が殺された。この残虐きわまりない蛮行が、事実上のホロコーストの始まりとなった。

このような蛮行に手を染めたのは親衛隊行動部隊だけではなかった。ドイツ軍も、ユダヤ人やロマの虐殺に荷担し、ソ連軍捕虜に対しても国際法を無視した蛮行を加えた。独ソ戦争の帰趨（きすう）が、ユダヤ人の追放政策と民族移住政策のゆくえを決めることになった。

ヒトラー政府は、膨れあがった行き場のないユダヤ人をソ連領内、東方のかなたに追放しようともくろんでいた。しかし、当初の電撃的勝利は長続きせず、四一年秋に戦争の長期化が明らかになると、ユダヤ人を東方のかなたへ追放しようとする方針は、リアリティを失った。この間、各地に設けられたゲットーの生活環境は悪化の一途をたどり、食糧不足と衛生環境の劣悪化のために疫病が蔓延した。親衛隊幹部は、自ら招いた強制移住政策の破綻と、ゲットーで生じている問題に早急に解決策を見出さなければならなくなった。

最初は現場レヴェルでの話だった。ゲットーを管理する現場の指揮官の間で、「役立たずの大食らいを処分」する方策が検討され始めた。そして解決の手段として、ドイツ本国の安楽死殺害政策で用いられたガス殺が有力な選択肢としてあがった。その方が射殺したり、餓死させたりするよりも「人道的だ」という意見もあったのである。

国家公安本部長ハイドリヒは、四一年七月末、ゲーリングから「ユダヤ人問題の最終解決を実行するための組織的・実務的・物質的な準備措置に関する全体計画」を提示するよ

う求められた。ハイドリヒはこのような状況下で、従来の追放政策から絶滅政策への切り替えの可能性を検討し始めた。

先に述べた四一年夏から秋にかけての、ソ連との戦いで繰り広げられたナチ・ドイツによる蛮行が、この政策転換を決定づけた。ソ連軍捕虜への組織的な殺害が進行するなか、支配下においたソ連やポーランドのユダヤ人を生かしておく根拠をハイドリヒはもたなかった。

ところでヒトラーは、どうしていたのだろうか。すでにホロコーストは始まっていた。四一年の晩夏から初冬のどこかの時点で、ヒトラーは、ヒムラー、ハイドリヒに対して、すでに現実のものとなったユダヤ人政策の転換、すなわちホロコーストの始まりに承認を与え、これを加速させたのだった。

ドイツ国内のユダヤ人

このようにして、ポーランドやソ連のユダヤ人は殺されていった。

一方で、ドイツを含む西ヨーロッパのユダヤ人の処遇に関して、ヒトラーはまだ明確な方針を固めていなかった。殺害すべきユダヤ人の定義、とくに「混血ユダヤ人」の扱いについて国家公安本部も決めかねていた。ウィーン、ベルリン、ハンブルクなどドイツ諸都

市からの国内ユダヤ人の東方（ウーチ、ミンスク、カウナス、リガ）への移送は四一年一〇月一五日から断続的に行われたが、そこでは複雑な事情を反映して命令系統の混乱なども起こった。

この時期、ドイツ国内では、空襲で都市が破壊されているのにユダヤ人が住まいをあてがわれているのは不条理だというナチ党大管区長の声や、早くユダヤ人を追放して、彼らの住居や残していく財産を皆で有効利用すべきだという人びとの要求が強まっていった。

ヒトラーは、ドイツのユダヤ人が東方へ送られる最初の移送を、国民の動静を注視しつつ、今後のユダヤ人政策を占うテストケースとして見守ったに違いない。東方への移送は白昼堂々と行われた。一部のユダヤ人は移送先でただちに殺害されたが、そのことで国民がどのような反応を示すかについても、ヒトラーは注意深く検討したのだろう。

対米開戦と反ユダヤ妄想

ヒトラーは、一九四一年一二月一一日に対米宣戦を布告した。

その翌日、ヒトラーはナチ党大管区者会議の場で、ドイツを含むヨーロッパ・ユダヤ人を絶滅させる意志を表明した。

ヒトラーは、ドイツ支配下のヨーロッパ・ユダヤ人には対米・対英交渉の「隠れた切り

9784062883184

ISBN978-4-06-288318-4
C0222 ¥920E (0)

定価：本体920円（税別）

「人類の歴史における闇」ともいえる
ヒトラー政権時代。
その数々の疑問に
最新研究をふまえ、答える!

- ヒトラーは、いかにして国民を惹きつけ、独裁者に上りつめたのか?
- なぜ、ドイツで、いつのまにか憲法は効力をなくし、議会制民主主義は葬り去られ、基本的人権も失われたのか?
- ドイツ社会の「ナチ化」とは何だったのか?
- 当時の普通の人びとはどう思っていたのか?
- なぜ、国家による安楽死殺害やユダヤ人大虐殺「ホロコースト」は起きたのか?

本書の内容

第一章　ヒトラーの登場
第二章　ナチ党の台頭
第三章　ヒトラー政権の成立
第四章　ナチ体制の確立
第五章　ナチ体制下の内政と外交
第六章　レイシズムとユダヤ人迫害
第七章　ホロコーストと絶滅戦争

9784062883184

ISBN978-4-06-288318-4
C0222 ¥920E (0)

定価：本体920円（税別）

「人類の歴史における闇」ともいえる
ヒトラー政権時代。
その数々の疑問に
最新研究をふまえ、答える!

- ヒトラーは、いかにして国民を惹きつけ、独裁者に上りつめたのか?
- なぜ、ドイツで、いつのまにか憲法は効力をなくし、議会制民主主義は葬り去られ、基本的人権も失われたのか?
- ドイツ社会の「ナチ化」とは何だったのか?
- 当時の普通の人びとはどう思っていたのか?
- なぜ、国家による安楽死殺害やユダヤ人大虐殺「ホロコースト」は起きたのか?

本書の内容

第一章　ヒトラーの登場
第二章　ナチ党の台頭
第三章　ヒトラー政権の成立
第四章　ナチ体制の確立
第五章　ナチ体制下の内政と外交
第六章　レイシズムとユダヤ人迫害
第七章　ホロコーストと絶滅戦争